

# ドイツ・スペインの美食観の違いに関する

## 統計的推定と考察

### 要旨

氏名：加藤綾音、越海里香

「美食」の定義は普遍的なものではなく、時代によって様々に変化している。これは、美食という価値観には当時の社会が食とどのように向き合ってきたかが反映されているからである。美食に関する先行研究調査史においては、スペインは美食の文化が発展している国として様々な論文でその歴史的・政策的背景が研究されているのに対し、ドイツは美食研究においてはあまり取り上げられてこなかった。また美食文化の成立と発展史においても、フランス革命期のレストラン誕生の経緯などの定説が繰り返し引用されるばかりで、より深い「人々の意識」という面にはあまり注目されてこなかった。

そこで本研究では、先行研究をもとに現代における美食の意味を再定義した上で、「人々の意識」という切り口から、「スペインは美食の文化（美食観）があり、ドイツはそうでないと言えるか」という問いを設定し、統計的手法で検証・考察することとした。具体的には、食事の目的として「活動に必要な栄養摂取すること」を1、「食事自体を楽しむこと」を5としたときにどちらを重視しているかを5段階評価で回答してもらうアンケート調査を実施し、両国の「美食スコア」に有意な差があるかどうか検定する。本研究は、美食を「人々の意識」という新たな切り口から読み解こうとする点において、美食の研究史において一定の意義があると言える。

結論として、両国の美食スコアには統計的に有意な差が認められ、上記の仮説は正しいことがわかった。しかし、ドイツの美食スコアは必ずしも小さい値ではなく、「スペインには美食観があり、ドイツには美食観が存在しない」というよりも、「スペインの美食観はドイツの美食観よりも高い」という表現が適切であると結論した。またインタビュー調査などからは、美食や食文化全般に対する各国の意識の差は縮小していることがわかり、今後もますます美食観の差が縮小すると共に、今回と同様の調査を行った場合の結論も変化する可能性がある。